www.gakurin.co.jp

NO. 191 共創ネットワーク

学林舎情報

●発行日：2018年6月16日（土）

〒661-0035　兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3　TEL 06-4962-5876　FAX 06-4962-5877　e-mail　info@gakurin.co.jp

発行：教材出版 学林舎

GAKURINSHA TOPICS

2018年教育の行き先

学習指導要領改訂によって教科書どう変わる？ －理科・社会編

新学習指導要領では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱の目標が掲げられています。これらの目標のもとに改訂された、理科と社会の新しい指導要領について、具体的な内容を整理します。

【理科】

（１）小学校理科

１．目標

新学習指導要領では、小学校理科における「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を次のように示しています。「知識及び技能」とは、「自然の事物・現象についての理解を図り、観察・実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする」こと、「思考力、判断力、表現力等」とは、「観察、実験などを行い、問題解決の力を養う」こと、「学びに向かう力、人間性等」とは、「自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う」こととしています。

これらの目標を実現するために、今回の改訂で追加、移行された主な内容を説明していきます。

２．内容

①小学３年生

「音の伝わり方と大小」が追加されます。ここでは、音を出したときの震え方に着目して、音の大きさを変えたときの震え方の違いを比較して調べる活動を行います。この内容を追加することで、中学１年生の「光と音」の学習につなげることができます。

②小学４年生

「雨水の行方と地面の様子」が追加され、「光電池の働き」が小学６年生に移行します。「雨水の行方と地面の様子」では、雨水の流れ方やしみこみ方に着目して、それらと地面の傾きや土の粒の大きさとを関連付けて調べる活動を行います。この内容を追加することで、小学５年生の「流れる水の働きと土地の変化」や小学６年生の「土地のつくりと変化」の学習につなげることができます。

③小学５年生

「水中の小さな生物」が小学６年生に移行します。

④小学６年生

「人と環境」が追加され、「光電池の働き」が小学４年生より、「水中の小さな生物」が小学５年生より移行し、「電熱線の発熱」が中学２年生に移行します。「人と環境」では、人と環境との関わり方の工夫に着目して、持続可能な環境との関わり方を多面的に調べる活動を行います。この内容を追加することで、小学４年生の「季節と生物」の学習を踏まえて「生物と環境」について学習することができます。そして、中学３年生の「生物と環境」の学習につなげることができます。また、「水中の小さな生物」は、小学６年生に移行することで、生物には食う食われるの関係があることを学ぶ際に、魚と水中の小さな生物の関係も捉えることができるようになります。「光電池の働き」は、小学６年生に移行することで、光電池を使って自分で電気をつくり出し、その電気を蓄えたり変換したりして、エネルギーが蓄えられたり変換されたりする現象を体験的に捉えることができるようになります。

（２）中学校理科

１．目標

新学習指導要領では、中学校理科における「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を次のように示しています。「知識及び技能」とは、「自然の事物・現象についての理解を深め、科学

的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする」こと、「思考力、判断力、表現力等」とは、「観察、実験などを行い、科学的に探究する力を養う」こと、「学びに向かう力、人間性等」とは、「自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度を養う」こととしています。

これらの目標を実現するために、今回の改訂で改善された内容や、移行された内容の主なものを説明していきます。

２. 内容

①中学１年生

「生物の分類の仕方」に関する内容が扱われるようになり、「動物の体の共通点と働き」が中学２年生より、「２力のつり合い」、「自然の恵みと火山災害・地震災害」が中学３年生より移行します。中学１年生から他学年へ移行する内容もあります。「圧力」、「葉・茎・根のつくりと働き」は中学２年生へ、「水圧・浮力」は中学３年生へ移行します。

これまでは、植物を分類するときに外部形態と内部形態を観察して分類していましたが、改訂により外部形態の観察から共通点や相違点を見つけて分類するようになります。

②中学２年生

「放射線」に関する内容が扱われるようになり、「電熱線の発熱」が小学６年生より、「圧力」、「葉・茎・根のつくりと働き」が中学１年生より、「自然の恵みと気象災害」が中学３年生より移行します。中学２年生から他学年へ移行する内容もあります。「動物の体の共通点と働き」は中学１年生へ、「生物の種類の多様性と進化」は中学３年生へ移行します。

理科は「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」の４つの柱で構成されていますが、改訂により「圧力」は、「エネルギー」から「地球」へ移動します。これは、「気圧」と「圧力」を関連付けて理解させるねらいがあります。

③中学３年生

「水圧・浮力」が中学１年生より、「生物の種類の多様性と進化」が中学２年生より移行します。中学３年生から他学年へ移行する内容もあります。「自然の恵みと火山災害・地震災害」は中学１年生へ、「自然災害の恵みと気象災害」は中学２年生へ移行します。

このように、小学校理科、中学校理科では、学習内容の追加や学年間移動にともなって教科書の内容が変わります。また、平成 30 年度からは移行措置が始まるので、その補助教材に注目する必要があります。

【社会】

次に、小学校、中学校の社会科における目標と内容を整理します。

１. 目標

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を養成するために、社会科では、以下の内容が目標に追加されました。

「知識・技能」

・資料や調査活動を通じて情報を適切に調べ、まとめる技能。

「思考力・判断力・表現力等」

・社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力。
・考えたことや選択・判断したことを適切に表現する（説明したり、それらをもとに議論したりする）力。

「学びに向かう力・人間性等」

・よりよい社会のために、主体的に問題を解決しようとする態度。

これらの目標にもとづき、社会科の内容がどのように変わるのかを読み解きます。

２. 内容

（１）小学校

小学校においては、現行の学習指導要領で小学３年生と小学４年生の内容をまとめて扱いましたが、新学習指導要領より、各学年に分けて記載するようになりました。各学年の学習内容がどのように変化するのか、詳細に説明します。

①小学３年生

小学３年生における学習単元に、地域の安全を守る働きが加わり、身近な地域や市町村の様子、地域の生産や販売の仕事とともに、地域社会についての学習とし

てまとめられました。人々の生活の変化について学ぶ単元には、時間の経過にともなう市の様子の変化についての内容が追加されています。また、公共機関の学習とともに、租税の役割について学習し、人口について触れる際には、少子高齢化や国際化についても学習するようになります。さらに、小学３年生から地図帳を活用した学習が始まります。地図帳では、身近な地域だけでなく、都道府県や外国についても調べるようになります。

②小学４年生

現行の県（都、道、府）の様子についての単元が、都道府県の地理的環境や名称、位置に関する単元と、県内の特色ある地域に関する単元に区分されました。また、県内の特色ある地域には、国際交流に取り組んでいる地域についての学習が追加されています。自然災害について学習する単元が、現行の学習指導要領の地域社会における災害および事故の防止についての単元から独立して取り上げられ、自然災害への対処や備えについても学習するようになります。文化財や年中行事についての単元は、地域の発展に尽くした先人の働きの単元とともに小学４年生に配当されました。地域の発展に尽くした先人の働きの具体例には、「開発、教育、文化、産業」の分野に、「医療」が新たに加わっています。

③小学５年生

小学５年生では、まず我が国の国土の単元において、竹島や北方領土の問題や、尖閣諸島には領土問題は存在しないことが明記されました。我が国の産業と情報の関わりの単元では、情報や情報技術を活用して発展している産業の具体例が、「教育、医療、福祉、防災」から、「販売、運輸、観光、医療、福祉」に変更となっています。

④小学６年生

学習する単元の順番が、公民、歴史、国際社会に変更されています。歴史の単元においては、当時の世界との関わりにも目を向け、我が国の歴史を広い視点から捉えるという内容が追加されています。

（２）中学校

中学校においては、地理、歴史、公民の分野別に考察を行います。

①地理的分野

地理的分野では、「世界と様々な地域」と「日本の様々な地域」の２単元構成でしたが、「世界と日本の地域構成」を加えた３単元構成に変更となりました。それにともない、我が国の国土や時差についての計算を、地理分野の冒頭で学ぶようになっています。また、日本の地域構成を学習する際には、竹島と北方領土について取り上げ、尖閣諸島には領土問題は存在しないことが明記されました。

②歴史的分野

歴史的分野では、歴史的な事象について理解させるだけでなく、歴史的な事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを多面的・多角的に考察し、説明・議論する力を養うことが重視されています。

③公民的分野

現代社会の情報化については、人工知能による産業や社会の変化や、災害時における防災情報の発信について取り上げることが追加されました。経済においては、起業について取り上げ、経済活動や起業などを支える金融などの働きを取り扱うことや、労働保護立法についての内容が加わっています。

社会科では、新学習指導要領において、学習する学年の変更や新たに追加される内容などが見られました。また「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の柱にもとづいて、地図や資料を読み取り、活用し、それらを表現する能力も求められています。このような変更により、教科書がどのような内容になるのか、今後注目していくべきです。（文／学林舎編集部）

2018年教育の行き先

「小1プロブレム」「中1ギャップ」「高1クライシス」

「小１プロブレム」「中１ギャップ」「高１クライシス」という言葉が近年使われ始めています。この耳慣れない言葉にはどのような意味があるのでしょうか。「プロブレム（問題）」「ギャップ（大きなずれ）」「クライシス（危機）」、いずれも不安をかき立てる言葉です。これらは、子どもたちを取り巻く教育環境が大きく変化する小１・中１・高１の時期において、その変化に適応することの難しい子どもたちがいることを表しています。

○小１プロブレム

小学校に入学したばかりの子どもたちは、新しい環境にとまどいながらも、徐々に小学校や教室、新しい友だちに慣れていきます。しかし、「小１プロブレム」に陥ることもあります。「小１プロブレム」とは、『入学後の落ち着かない状態がいつまでも解消されず、教師の話を聞かない、指示通りに行動しない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩いたり教室から出て行ったりするなど、授業規律が成立しない状態へと拡大し、こうした状態が数か月にわたって継続する状態（東京都教育委員会）』と定義されています。

小１プロブレムが発生する原因としては、他者とのかかわりが希薄で、集団での行動を身に付けることなく小学校に入学してくる子どもの増加や、家庭での基本的なしつけが不十分であることなどがあげられます。小１プロブレムを解消するために、未就学児童のいる家庭でのしつけの呼びかけや、幼稚園・保育園と小学校の連携などが図られていますが、抜本的な解決には至っていません。

○中１ギャップ

小学校から中学校に進学し、環境の変化に適応できずに、不登校やいじめなどの問題が発生する現象のことを指します。中学校に入ると、学習面でも生活の面でも大きな変化がおこります。学習面では、それまでの担任教師による授業から、科目別の教師による授業へと変化、授業のスピードも難易度もあがり、定期テストも行われるようになります。また、生活面では、クラブ活動が始まり、先輩・後輩という新しい人間関係が発生します。このような大きな変化に適応できず、学校に行きたがらない、口数が減る、部屋に引きこもるようになる、などの問題行動がおこることがあります。

中１ギャップを克服するためには、どのような対策があるのでしょうか。家庭では、子どもが自分の不安や悩みを話しやすい環境を整えることがあげられます。話を最後まで聞き、親の体験を話すなど、子どもの悩みを受け止める環境が望まれます。また、学習のつまずきも大きな要因となるため、学習面では、学校が中心となってフォローしていく必要があります。

○高１クライシス

中学を卒業し、受験をのりこえ入学した高校で、小１・中１と同じように、環境に適応できず、不登校や引きこもりなどの「高１クライシス」とよばれる現象に陥ることがあります。小１・中１の変化の状況に加えて、進路の問題がさらに子どもたちの大きな壁になっていることがあげられます。また、「自分とは何者なのか」といった思春期特有の不安にとらわれることもあります。「高１クライシス」が小１・中１の問題と大きく異なるのは、高校が義務教育ではない点です。「高１クライシス」が退学という結果に至ることがある点で、問題はより深刻です。

高１クライシスを克服するには、家庭や学校が子どもを注意深く見守ることに加えて、カウンセリングや心療内科の受診なども考えられます。新しい環境に適応していく順応性、不安にうち克つ心を培っていくことが何より大切です。（文／学林舎編集部）

クロスロード Crossroad

第82回　文／吉田 良治

アメリカの大学の卒業式

アメリカではこの時期卒業式シーズンを迎えます。私がフットボールチームのアシスタントコーチをしたワシントン大学では、今月 9 日に卒業式が行われました。約 5,500 名以上の学生が卒業し、新たな進路に向け旅立っていきました。秋入学が一般的なアメリカではこれから長い夏休みに入ります。ジョージア工科大学ではワシントン大学より 1 か月以上早い 5 月 5 日に卒業式が行われました。日本では春学期真っ只中のこの時期、アメリカの多くの大学では早くも夏休みに突入しています。

日本では大学の授業に出席し、授業を受けることが最大の目的になりがちですが、大学教育にとって重要なことは、受けた教育をどう生かすのか、ということにあります。つまり実践で活かすということになるわけですので、当然授業以外の活動に費やす時間の確保が必要になっていきます。

授業以外の活動としては卒業後の進路に向けた準備として、企業などでのインターンシップなどがあります。実際企業の仕事を通して実践で職能力を育んでいくわけです。アメリカでは職歴がない新卒者を採用し、給料を支払い、一から手取り足取り仕事を教える企業はありません。新卒者を採用しても自力で仕事ができない状態では、雇用し給料を支払いする意味がありません。バットの持ち方すら知らないものをドラフトで指名するプロ野球球団がないように、仕事がわからないものを雇用する企業はアメリカにはないのです。そのために学生の間からインターンシップを活用し、企業で実践経験を積んでいくことが、学生にとってキャリアパースとして重要な活動になっていきます。インターンシップの経験はインターンとして受け入れた企業だけでなく、他の企業でも雇用の判断基準にもなりますので、いかに質の高い中身のある実践経験に繋げることできるかが重要です。となると、日本で一般的な 1 日から 3 日程度の職場体験型インターンシップとは中身が全く違ってきます。実践経験を積む期間がある程度確保できないと、1 ～ 3 日程度の職場体験で得られるものと、実践で真剣勝負をするインターンシップ経験と本質的に大きな違いが出てきません。インターンシップの評価次第では、新卒後大手企業がマネージャー職で採用することも珍しくありません。新卒者であっても初年度の年俸が 6 万ドル、職種によっては初年度年収 10 万ドルというケースもあります。学生時代の教育と実践の場としてのインターンシップの経験が立派なキャリアパース・職歴なるということです。

アメリカでは大学の卒業生の多くは、まだ進路が明確になっているものはそう多くありません。日本のような何の職歴もない新卒者を対象に 1 年以上前から採用活動をして、内定者を確保するような無駄なことをする企業はありません。その時期に人材が必要な部署で、必要な職種の即戦力の人材を雇用するのみです。新卒者であっても一般的な転職者と同等レベルで求職活動をします。ですから採用が決まれば 1 週間から 10 日以内に出社して、その日から成果を上げていくことが求められます。野球選手なら初日から即バッターボックスに立って、結果を出すことが求められます。アメリカの大学生にとっては長い夏休みであっても、のんびりと過ごす時期ではなく、将来に向けて真剣勝負をする期間であるといえます。（つづく）

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog
http://ameblo.jp/outside-the-box/